

## 休むこと―安息・祭り・遊び

### ―聖書の視点から―

ルシア 布川 悦子

新約聖書では「休むこと」がどのように捉えているのかを、聖書箇所をいくつか取り上げながら見てゆきます。最初に、マルコ福音書 1章21節以下を読み、イエスが示そうとした「安息」についてまとめてみたいと思います。次に、テサロニケの信徒への手紙二の 3章12節で「落ちていて」と訳されている語の用い方から、キリスト者にとつての「祭り」を考える手掛かりを探してゆきます。最後に、ルカ福音書で「楽しむ・遊び暮らす」と訳されている動詞の用法を確認しながら、神が招いている「遊び」とは何かを学びたいと思います。

### 「イエスが教えた「安息」

#### マルコ 21―28節の直訳

- 21 そして 彼らは入る カファルナウムの中に。  
そして すぐに 安息日に 会堂の中に入って、 彼は教えた。
- 22 そして 人々は驚愕した 彼の教えに、  
なぜなら 彼は教えていた 彼らに 権威を持つ者のように  
そして 律法学者たちのようにでない。
- 23 そして すぐに いた 彼らの会堂に 汚れた霊のついた人が、  
そして 彼は叫んだ、
- 24 言って、  
「何が 私たちに そして あなたに、 ナザレのイエスよ  
あなたは来たのか 私たちを滅ぼすために  
私は知っている あなたを、 誰で あなたがあるか、 神の聖なる者」。
- 25 そして 彼を叱った イエスは 言って、  
「黙れ、 そして 出ろ 彼から」。
- 26 そして 彼を引きつけさせて 汚れた霊は、  
そして 声を出して 大きな声で、 彼は出た 彼から。
- 27 そして 驚いた すべての人が、  
彼ら自身に質問するほどに 言って、  
「なんで あるか これは、 権威をもった新しい教え。  
そして 汚れた霊に 彼が命じる、  
そして 彼らは従う 彼に」。
- 28 そして 出た 彼の評判が すぐに ガリラヤの周辺全体くまなく。

①マルコ一21―34は、「カファルナウムの一日」と呼ばれる箇所。その最初の出来事が21―28節に描かれています。この出来事の後も、イエスはさまざまな病をいやし、悪霊を追い出し、人を苦しめる力を追い払います。この一日はイエスが生涯にわたって果たす役割を凝縮した一日です。汚れた霊を最初に追い出すのは、汚れた霊とは人が神と向き合うことを妨げる力だからであり、汚れた霊を追い出すという出来事によって、神の支配が近づいたことを示しています。

②イエスが「出る」と言うと、汚れた霊は「出た」（25―26節）という出来事を見た人々は、「イエスが命じると、汚れた霊らは従う」と言い、イエスの言葉を「権威をもった新しい教え」と言って、驚きます。ここで注目したいのは、イエスは何か教説を語ったのではなく、「出る」と言ったのであり、その言葉が「出た」という出来事となって現れたということです。人々がイエスに見た権威とは、「言葉が出来事となって現れる」という権威であり、そこに人々は神の支配を目の当たりにしたのです。それは、『光あれ。』こうして、光があった」という創造の業を行う神が持つ権威であり、イエスはその神の権威を与えられた者であることをマルコ福音書は描こうとしています。

③イエスは「安息日に」会堂で、汚れた霊を追い出すことによって、神の支配を現しました。「カファルナウムの一日」を最初として、イエスは安息日に神の支配を現す業を行ってゆきます。旧約聖書にある安息日規定には「仕事をやめねばならない」とあります。そこで、律法学者たちは「仕事をしない」という掟を守るために、「何が仕事となり、どこまでなら仕事にならないか」を問題にしました。ユダヤ教の人々にとっては、「安息日は仕事をしてはならない日」ですが、イエスは安息日を神の支配を現す日として働きます。安息日は本来、七日目に仕事をしないことによって、神の業（天地創造・出エジプト）を思い起こし、自分たちの原点を忘れないためにあります。それによって、残りの六日間は神と共に働く日となります。イエスは、汚れた霊を追い出し、病をいやすことによって、安息日を、神と出会う日、神が今もここにいて苦しむ者を救うために働いておられることを知る日とします。

## ロキリスト者にとっての「祭り」

### 2テサロニケ三11―12の直訳

11 私たちは聞いている なぜなら ある人たちを  
歩き回る人たちを あなたがたの中で 規律なく、  
何も働かない者たちを そうではなく から働きをする者たちを。

12 だが そのような人たちに 私たちは勧める

そして 私たちは励ます 主 イエス・キリストの中で  
静けさと一緒に 働きながら 自身のパンを 彼らが食べるように。

- ① 12節の「静けさと一緒に」は、新共同訳では「落ち着いて」と訳されています。「静けさ」と直訳した語はギリシア語のヘーシュキアーであり、「静穏・落ち着き」や「静粛・沈黙」を意味します。
- ② ヘーシュキアーと同根の動詞ヘーシュカゾーも、「静かにしている・休息している」や「静かにしている・黙っている」を意味します。たとえば、ルカ二三56「婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」で、「休む」と訳されているのがヘーシュカゾーです。この語のもとの意味を考えれば、安息日に「休む」とは、単に身体を休めることではなく、「静かにしている」ことであり、それは沈黙に通じる静けさです。この動詞ヘーシュカゾーは、1テサロケ四11「そして、わたしが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」では、「落ち着いた生活をする」と訳されています。安息日を守る姿勢とキリスト者の生活が、同じ動詞で表され、しかも、それが「静かにしている」という意味の動詞であることに注目したいと思います。
- ③ 2テサロニケ三11の「規律なく歩き回る人たち、何も働かない者たち、から働きをする者たち」は、新共同訳では「怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者」と訳されています。彼らは二2から考えると、「主の日は既に来た」と主張している人たちであって、主の日が来たからには、この世に関わる仕事に従事すべきではないと考えたのだと思われれます。今すぐにでも主の日が到来すると期待していた彼らは、その遅延に苛立ち、わずかなしるの中に、主の日の到来を無理に見て、この世の仕事どころではないと熱狂したのかもしれない。彼らはただの怠け者ではなく、自分たちの信仰理解にもとづいて、働かずに「から働き」をしていた人たちであり、このような熱狂に対して、「自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい」と教えています。
- ④ キリスト者が「落ち着いて仕事をする（静けさと一緒に働く）」のは、主の日の到来をあきらめたからではなく、むしろ、それを確信しているからです。キリスト者は「静けさ」と共に働き、生きてゆきます。その「静けさ」は、神への信頼から来る「静けさ」であり、確かな救いをもたらす神が与える「静けさ」です。「から働き」にしかない熱狂は、むしろ未熟な信仰を覆い隠すものであり、神の救いの業を信頼して生きる者の姿勢は、「熱狂」ではなく、「静けさ」であると捉えられています。
- ⑤ このような見方が可能であるなら、キリスト者にとっての「祭りⅡ安息日」は、いわゆる「お祭り騒ぎ」とはまったく異なるものであり、むしろ、神の「静けさ（救いの確かさ）」に触れ、自らもその「静けさ」を生きる力を与えられるものであるといえます。「静けさと一緒に働く」とは、「神と共に働く」と言いかえることができるかもしれません。

目取り上げられる「遊び」と差し出される「遊ぶ」

ルカ二一16―21の直訳

- 16 だが彼は言った たとえを 彼らに対して 言いながら、  
「ある豊かな人の 豊作であった 土地が。」
- 17 そして 彼は思案していた 自分の中で 言いながら、  
『何を 私はなすべきだろう、  
というのは 私は持たない どこに 私は集めるだろう **私の実を**』
- 18 そして 彼は言った、  
『このことを 私はなすだろう、  
私は壊すだろう **私の倉を** そして より大きいのを 私は建てるだろう  
そして 私は集めるだろう そこに すべての麦を **私の良い物を**  
そして 私は言うだろう **私の魂に**  
魂よ、 おまえは持っている 多くの良い物を 置かれた物を 多くの年のために。  
おまえは休みなさい、 おまえは食べなさい、  
おまえは飲みなさい、 おまえは楽しみなさい。』
- 20 言った だが 彼に 神は、  
『無分別な者よ、 この夜 あなたの魂を 彼らは取り戻す あなたから。  
だがあなたが準備したところのものは、 誰のために あるだろうか』
- 21 このように 自分のために蓄える者は そして 神のために豊かでない者は。」

① 19節で「楽しむ」と直訳した動詞はエウフライノー。エウフライノーの受動態は「喜ぶ・楽しむ」を意味し、特に、19節のように、食事や宴会の楽しみを表すときにも用いられます。この動詞は、ルカ一六19「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」では、「遊び暮らしていた」と訳されています。ルカ福音書では、どちらの用例も、金持ちの生活を表すためにこの動詞は用いられており、金持ちの「楽しむこと・遊び暮らすこと」は、神との結びつきを持たない生活として否定されています。

② 17―19節の金持ちの言葉には、「私の」が4回現れます。金持ちの意識の中には「私」だけしか存在しないことが、このような繰り返しによって強調されています。彼は豊作によって得た実りを「私」のためだけに蓄えます。そして、「休みなさい、食べなさい、飲みなさい、楽しみなさい」と自分に語ろうとします。ここで「休む」と訳されているのは、アナパウオーという動詞の受動態です。「楽しむ」と対応する形で置かれているので、この「休む」はルカ二三56とは異なり、安息日に「休む（静かにしている）」こととは異なる休みを表しています。

③ 神は、「私」だけの豊かさに満足し、それを楽しむ生き方を「無分別な・愚かな」生き方であると批判します。ルカ一六19に登場する金持ちも「遊び暮らし」、貧しいラザロ

を顧みることはありませんでした。ルカ福音書では、「富」は自分のために用いるのではなく、貧しい者と共に生きるためのものと教えられています。ですから、神が心に留める貧しい者と共に生きることのない人々の「楽しみ」や「遊び」は取り上げられません。

④それに対して、ルカ15章には「エウフライノー（楽しむ）」が肯定的に用いられている箇所があります。23節「祝う」、24節「祝宴（をする）」、32節「宴会を開いて楽しむ」はいずれもエウフライノーであり、「失われていた息子」の帰還を喜ぶ父のあり様を表しています。この父の喜びは、ルカ15章の一連のたとえの文脈では、天や神の天使たちが一人の罪人の悔い改めを喜ぶことに対応しています（7・10節）。いずれの箇所でも、喜びは失われていたものとの交わりが回復したことから生じており、このような喜びを述べることで、ルカは神がどのような方であるかを教えています。29節の「宴会をする」もエウフライノーですが、ここでは父に怒りをぶつける兄に使われ、仲間と「楽しむ」ために子山羊をくれたことがないと抗議します。言いつけ（エントレー）に忠実な者にこそ報いを与えるべきだと考える兄は、弟に寛大な父のふるまいを理解できません。こうした兄の姿によって、罪人たちが歓迎するイエスを非難する律法学者やファリサイ派の姿が浮き彫りにされています（2節）。

⑤ルカ福音書では、「金持ちの自分のためだけの楽しみ」や「律法を守っていることを誇る人々の楽しみ」は否定され、「失われていた者が立ち帰ったことを喜ぶ神の祝宴」が何よりも優先されることが示されています。このようなルカの描写を通して考えるなら、人が遊ぶとき、それが神に認められる「楽しみ」となるためには、「食べて祝おう」という呼びかけに答え、招かれている「神の喜びの祝宴」に連なる者とならなければなりません。父が開く祝宴を拒絶した兄のようにではなく、「失われていたもの」が見出されたことを共に喜ぶ者となるとき、私たちの「楽しみ」は否定される「遊び」ではなく、「神の喜びを表す楽しみ」になるはずで

## IV 休むこと

安息日は、イエスの神の支配の宣教によって、過去の神の救いの業を思い起こす日から、現在も目の前で救いを起こすために働いている神を知る日へと変わりました。神の救いに出会った者は、一時的な熱狂に惑わされることなく、「静けさ」を持って生きる者となります。その「静けさ」は、確かな救いをもたらす神から来る静けさです。キリスト者は、イエスによつて救われることが確かであるという約束を信じて生きる者ですから、熱狂や空回りするような行動をとることがありません。確かな未来を信じているから、現在を落ち着いて生きることができのです。ですから、キリスト者にとって、「祭り」とは、人間の側の興奮や熱意によつて繰り広げられるものとは異なり、神の現存に身を委ねる安息となります。そのような安息を知るキリスト者にとって「楽しむこと（遊び）」は、個人的なものになることはなく、神の救いの業を喜ぶ者の集まりの中に存在します。